

1. 概要

【主担当部局】横浜市教育委員会事務局
特別支援教育課

【自治体 本事業関連URL】
現時点でウェブページの開設なし。

本事業の 目的	【当該地域におけるこれまでの課題】 ・ 特別支援学級に在籍する児童生徒数は大きく増加しており、直近3か年では毎年1,000人程度ずつ増加している。 ・ 就学後の小学校1年～4年の段階で通常の学級（横浜市では「一般学級」という）から特別支援学級（横浜市では「個別支援学級」という）に学びの場を変更する児童が特に増えている。
	【本事業を通して達成を目指す目標】 ・ 特別支援学校と小・中学校が相互に情報を共有しながら、交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方や従来の枠組みに捉われない体制等について、十分な研究と検討を積み重ね、児童生徒の変容を検証していくことにより、すべての児童生徒が安心して学ぶ環境をつくり、可能な限り、地域の学校で共に学ぶ仕組みの基盤を構築することを目指す。

学校運営 連携校	特別支援学校	小・中・高等学校
	横浜市立若葉台特別支援学校 （児童生徒数）小：37名、中：24名、高等部：98名（A部門16名、 B部門82名）_R6.5.1時点 （障害種）肢体不自由障害（A部門）、知的障害（B部門）	横浜市立若葉台小学校：（児童数）347名_R6.5.1時点 横浜市立若葉台中学校：（生徒数）206名_R6.5.1時点 ※ 令和6年度は、小学校と特別支援学校が連携して実施。

カリキュラム・ マネージャー	【配置人数】1名(小学校・ 正規教員)	【主な経歴】 小学校勤務10年、特別支援学校勤務9年
	【本事業における役割】 ・ 交流及び共同学習における新しい授業の在り方や従来の枠組みにとらわれない体制づくりの検討。 ・ 両校の年間指導計画のすり合わせに基づき、共同学習における単元設定、授業プラン作成、指導計画の作成、および学校間の調整。	

連携検討会	【構成人数】 9名	【開催回数】 4回	【外部専門家】 横浜国立大学 D&Iセンター センター長
	※ 連携検討会には、構成人数のほか、両校の担任や横浜国立大学D&Iセンターの講師等、複数名が検討内容に応じて参加している		
	【連携協議会において検討・議論した主な内容】 ・ 教科等における交流及び共同学習の実施内容及び実施後の振り返り、取組の効果検証 ・ インクルーシブ教育を支えるための学校組織体制構築に向けた具体化、共通認識化 ・ インクルーシブ教育の環境で学んでいる児童の姿と将来的に目指す姿について、どのように具現化、言語化していくか		

2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

- ・ 単発での交流及び共同学習の実践で終わることがない、継続的に実施できる教科や単元を検討・検証していく。
- ・ 共に学ぶ単元で、特別支援学校と小・中学校の児童生徒それぞれに、育成を目指す資質・能力を検討していく。

実施内容

①		②	
対象学年：	若葉台特別支援学校小学部1年 若葉台小学校1年	対象学年：	若葉台特別支援学校小学部1年 若葉台小学校1年及び6年
回数・教科：	計5回（生活：1回、図工：2回、音楽1回、学活1回）	回数・教科：	計1回（国語：1回）
主な内容：	生 活： がっこうたんけん 図 工： やぶいた かたちから うまれたよ ならべて ならべて 音 楽： フルーツケーキ 学級活動： きもちをつたえよう きもちをしよう	主な内容：	国 語：6年生の読み聞かせを聞こう

※ 上記のほか、月1回程度、朝の会をオンラインを通して実施。また、令和7年1月30日に国語の授業を実施する予定。

指導内容・指導方法の工夫

- ・ 共同学習では、内容に応じて適切な環境（ホール、各グループごとの教室、校庭等）を設定し、小 学校一般学級、個別支援学級、特別支援学校の児童が参加できる場を設定した。
- ・ 、学びがつながるよう工夫した。オンラインによる挨拶交流や共同学習の成果（作品）を共有する等、相互評価の場面を設定し
- ・ 学習者の発達段階、障害特性に応じて視覚的な資料を多めに取り入れた。
- ・ 特別支援学校にある教材、教具を活用し、誰もが参加できる活動を設定した。

交流及び共同学習の成果

- ・ 共同学習において、「学びに向かう人間性」を共通の目標とし、インクルーシブな学びの在り方について検討をすることができた。
- ・ 共同学習の前後の時間での児童同士の自然な触れ合いが生まれている。また、回を重ねるごとに、お互いに声を掛け合う場面や、挨拶をする場面が増えた。



3. 現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

教員や専門スタッフの配置等の工夫

- ・ カリキュラムマネージャーは、小学校在籍の正規職員（個別支援学級の担任）とし、特別支援学校の兼務辞令を発令したうえで、週2回特別支援学校で授業、児童支援を行いながら、カリキュラムマネージャーとしての業務にあたっている。
- ・ 加えて、特別支援学校在籍の教員（1名）についても、小学校との兼務辞令を発令し、週1回小学校で授業、児童支援にあたっている。
- ・ これらの兼務発令と両校での支援等により、両校間の意識の共有が進んだり、連絡調整等を円滑に進めることができています。
- ・ 共同学習では、主たる授業者（メインティーチャー）を小学校の学級担任とした。授業内のグループ活動は、両校児童混合として、1つグループを小学校4～5名、特別支援学校1名とし、各グループにサブティーチャーとして特別支援学校の教員を1名配置したうえで、グループの児童全員への支援を行っている。これにより、両校児童に必要な課題や配慮を把握しながら、適切な支援をしながら学習活動を進めている。
- ・ そのほか、横浜国立大学D&Iセンターから複数名が常に参加し、授業の記録・アセスメント・分析等を担当している。

学校運営連携校間の一体的で専門性を生かした指導体制の構築

- ・ ニュージーランドのインクルーシブ教育について研修（本市の海外派遣研修）を受けた上記の特別支援学校の教員が、派遣先である公立小学校のインクルーブな教室環境の中で行われていたコミュニケーションツールを用いた授業を、本モデル事業の小学校でも実施した。この共同学習では、自分の気持ちを可視化し、気持ちを伝えあう経験が両校の児童にとってお互いを理解することへとつながることができた。

各学校運営連携校における校内体制の構築

- ・ カリキュラムマネージャーは、小学校と特別支援学校を兼務することにより、児童の実態を把握するとともに、必要な支援方法や児童に適しているコミュニケーションについて、常に両校の教員と情報交換をしており、それぞれの児童の相互理解をスムーズに進めている。
- ・ また、本市独自に兼務辞令をした特別支援学校教員については、小学校勤務を通して、特別な支援が必要な児童の状況を把握するとともに、支援を行っている。また、人的環境のユニバーサルデザインの視点を踏まえた言葉がけなどをしながら、児童同士の学び合いのサポートをしている。

教員研修の実施

- ・ 取組開始前に、事業開始の背景、取組の方向性について、各校の教員向けに実施。
- ・ カナダの教育委員会でEAとして勤務した経験がある方を講師として、カナダに学ぶインクルーシブ教育に関する研修を実施。



4. 課題と展望

令和6年度事業における課題

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】

- ・ 教科学習におけるそれぞれの学習目標の達成と、非認知能力部分における目標設定の在り方
- ・ 小学校での授業における教室等の環境の更なる工夫
- ・ 年間計画の作成に考慮する要素の整理
 - ▷ 目標達成を踏まえたカリキュラムや単元の中で効果的な活動や位置付け
 - ▷ 物理的条件や特別支援学校に在籍する児童の実態、教職員の取組への共通理解 など

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】

- ・ 交流及び共同学習の開始当初に必要な体制と、それぞれの児童生徒理解が進んだときとの、教員体制の比較検討
- ・ カリキュラムマネージャーの専任化
- ・ 特別支援学校の特別支援教育コーディネーターや兼務の教員が中心となり、センター的機能による小学校への支援
- ・ ユニバーサルデザインの視点からの授業改善への協力、支援

令和7年度事業の展望

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】

- ・ 各教科における目標設定、授業でのねらいの更なる精査
- ・ 特別支援学校のカフェを活用し、小・中学校の多様なニーズのある児童生徒の安心できる居場所づくりの推進
- ・ 特別支援学校中学部1年生（対象：準ずる教育課程）と中学校1年生の合同授業（遠隔授業）の実施

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】

- ・ カリキュラムマネージャーの専任化、及び、引き続きの両校への兼務発令による各校担任等との円滑な調整
- ・ 教科学習による交流及び共同学習における、支援体制（グループ活動において、何名の支援が必要なのか等）の具体的な体制の検討